



## 原発事故に思う

今年も残り少なくなってきた。3月には東日本大震災と福島原発事故という大変な惨事が起きてしまった。原発事故から9ヶ月。この間の感じたことなどについて少し記しておきたい。もとより放射線量などについての専門知識はないので、誤りがあれば御叱正いただきたいと思う。

まず感じるのは、残念ながら日本という国が国民の安全や生命、健康を守るというよりも深刻な事故をできるだけ小さく見せ、問題を矮小化しようとしているように思えるということである。ここでは憲法で保障されている基本的人権の一つとしての生存権とは一体何なのだろうと思われるようなことがいたるところで起きているように思われる。一つの象徴的と思われる例をあげるとチェルノブイリの原発事故の時には強制的(年間40mSv[ミリシーベルト]以上)あるいは義務的避難区域(年間15mSv以上)のほかに移住権利区域(年間5mSv以上)・放射能管理強化区域(年間1mSv以上)という区域が設けられていたという。この言葉には一定の放射線量が測定される区域の住民は(避難はしなくても良いが)避難したい者は避難しても良い。避難する権利を有しているという意味が込められている。極めて明快である。こういう発想が残念ながら現在のところ政府の避難区域の設定には見られないように思われる。だから国の指示を待たずに危険を感じて自主非難した福島などの人たちが十分な補償を受けられなかったりする。(注:これは最近若干の一時的な見舞金的なものが出されるようになりつつあるようだが、充分とはいえない。)また福島などではチェルノブイリで行われて真剣に考慮されるべき学童疎開なども一顧だにされていないのが「現実」である。

今、私の手元には日光市のホームページから入手した、「日光市放射線量マップ」[2011年10月3日～12日測定]がある。1キロ四方メッシュ間隔で測定箇所538箇所測定位置は地上50センチである。遅きに失した感はあるが、こうした基礎的なデータを出すという日光市の地道な努力は多としたい。今後も定期的な測量をお願いしたい。測定値を見ると高い順に、0.70～0.80( $\mu$ S/h [マイクロシーベルト毎時]以下同様)が1ヶ所。0.60～0.70未満が2ヶ所。0.50～0.60が10ヶ所となっている。これを大雑把に、1万倍して概算の年間放射線量として計算するとこれらの地区はウクライナの移住権利区域(年間5mSv以上)に達する可能性もあるのではないかとと思われる。(チェルノブイリ事故のときの基準は、一般にはベクレル、でしかわからず、シーベルトでの値はインターネットの livedoor.blog というものに依っている)

こうしたことから見ると日光市の放射線量は場所にもよるが決して安心といえるものではなく、危険と紙一重のところがあり、とりわけ未成年者や妊婦の方たちなどにとっては厳重警戒がなされてしかるべきである。



## 目次:

原発事故に思う	1
川むしたんけん隊	2
奥日光自然環境 保全セミナー	3
石原組合長を偲んで	3
熊鈴	4

8月に日光商工会議所の主催で中部大学教授の武田邦彦氏の講演があった。このときの話ではセシウム・ストロンチウムの除去のための日光市もできるだけ早く除染することが必要との話であった。その時の基準、目安として0.15 $\mu$ S/h以下としたほうが良いとのことであった。

武田氏は地元の酪農家の方の風評被害への対応の仕方についての質問に対して牛乳も数字で安全を示して欲しいと答えていたのが印象的だった。大手の牛乳メーカーは製品に含まれる1kgあたりの放射エネルギーを表示する義務がある。生産者は消費者の身になって売って欲しいと答えていた。これは生産者の方には耳が痛いかもしれないが正論である。案の定12月になって乳幼児の粉ミルクから30～40ベクレル/kgの放射線量が検出されたことで、問題になっている。中国では日本の粉ミルクの売り上げが、がた落ちとのこと当然である。

12月になって日光市でも食品の含有放射線を計測してもらえることとなった。簡易的なものようだが、とりあえずこれで充分だ。無料で2点までというので、自宅家庭菜園で取れた、黒大豆と柿の測定を依頼した。現在我々が直面している低線量被曝という現実、今後何十年という単位で十分な医学的なデータもない中で長期に続く。御用学者の言葉を信じていると、痛い目にあうに違いない。全てにいえることだが大事なことは自分の頭で危険と安全を考え自分なりに納得して行動していくことだろう。そのためには普通の市民がつながり合って助け合いながら進むしかない。

11月に佐野市で行われた「とちぎ国際有機農業映画祭2011」で「ミツバチの羽音と地球の回転」というドキュメンタリー映画を見た。これは中国電力が山口県上関町に作るとしている上関町原発への反対運動をおこなう祝島の人たちの暮らしとその運動を描くと共にスウェーデンでの自然エネルギー利用の先進的な取り組みを扱った映画で深い感銘を受けた。

幸いこの映画は日光市内で実行委員会が作られ上映されることになったという。ぜひ一人でも多くの方に見ていただきたいと思う。そして日本のエネルギーをどうしていくのかを一人一人が考えていくべき時だと思う。(森)

# 川むしたんけん隊 【7月、10月、ふたつの「たんけん隊」に協力しました】 (塚崎)

「NPO 和音」(猪倉児童クラブ)

7月30日(土) 10:00~14:00 気温26℃ (湿地水温15℃)

2日前からの豪雨で田川は増水中。「絶対、晴れる！」という力強い須佐さんの声が天に届いて、みるみる広がっていく青空の下、児童20名、大人15名で行きました。ただし川は無理なので、隣接した小さな湿地を探ることにしました。ここは以前アカハライモリがたくさんいた所で子供達もそれを覚えており、お目当てにしていたのですが、今回は4匹でした。林からの浸み出し水はかなり冷たく、落ち葉がたまった湿地には川とは異なる生きものがひそんでいます。泥んこになって半ベその子、尻餅ついても猪突猛進の子、それでも網とお皿は放さず、この日の子供達は「ガサガサたんけん隊」に変身しました。

スタッフの隅さんが川で捕まえてきてくれたドジョウとアブラハヤを加え、湿地で見つけた生きものをガラスケースに入れて児童館に持ち帰りました。その名前や種類を調べたところ、次の通りでした。

アカハライモリ、サワガニ、トウキョウダルマガエル、ニホンアマガエル、ヒメガムシ、マツモムシ、カワニナ、コシマゲンゴロウ  
＜オナシカワゲラ・カクツツトビケラ・イトトンボ・サナエトンボ(いずれも幼虫)＞ヒラマキミズマイマイ

今回のニューフェイスは小さな蝸牛、ヒラマキミズマイマイです。ベージュ色の薄い殻におおわれている5ミリぐらいの可愛い蝸牛。女の子が見つけてくれました。こんな小さな湿地にもいろいろな命が息づいていることを大人になっても覚えていて欲しいですね。

冷たい飲み物とおいしいカレーライス・漬物をたくさん用意して待っていてくれたお留守番部隊の皆さん、ありがとうございました。大きな笑顔と「お代わりー！」の連発で応えた子供達でした。この次の機会にはぜひ川遊びのできる天気であって欲しいと思いました。



増水した田川



いろいろな生き物が泥の中に...

「NPO なんとなくのにな」

10月9日(土) 10:00~13:00 気温19℃

佐下部橋上流の砥川。今年で三回目となりましたが、九月からの台風続きでここも増水。小さな川虫たちは流されてしまったようです。水温が低く(13.5℃)、流速もあるので安全第一を考え、1時間程の「たんけん」でしたが、生きものたちは予想より多く見つかりました。それらをガラスケースに入れて室内に持ち込み、顕微鏡で虫の体を見たり、表にその名前を書き込んだりして、四つの水質を表す指標生物を割り出しました。次のとおりです。

I (きれいな水) カワゲラ ヘビトンボ サワガニ プラナリア

II (少しきたない水) \_\_\_\_\_

III (きたない水) タイコウチ ヒル

IV (たいへんきたない水) \_\_\_\_\_

その他(指標生物外)

幼虫(モンカゲロウ、ガガンボ、カワトンボ、サナエトンボ、トビケラ)

ガムシ モンキマメゲンゴロウ ハヤ アカハライモリ ヤマアカガエル

虫の種類を基準とするので、この場所での水質階級は「きれいな水」です。特にヘビトンボとサワガニが毎回とてもたくさん見つかるので、子供達はいつも興奮気味。こんな川は他にはあまりありませんから、たくさんの人に知ってもらおうよう大いに自慢しましょう。

川の周辺を見回すとたくさんの広葉樹が生えています。役目を終えた葉が川に落ち、それを小さな川虫達がせっせと食べて分解してくれます。その川虫を魚が食べ、魚は鳥に食べられ、食物連鎖のお手本が揃っている場所といえましょう。川岸の岩のすき間から水がしみだしている所は、サワガニがお気に入りのようでした。ゆっくり会話をしながら昼食をとれたのも、「毎日クリスマス」のお部屋をお借りできたからです。ありがとうございました。スタッフの皆さん、今年もお世話になりました。来年も子供達の笑顔がたくさん見たいですね。引き続きよろしくお願いします。



## 奥日光水環境保全セミナーに参加！

「地域力で湖を守る」と題して、奥日光水環境保全セミナーが3回シリーズ(第1回10月26日、第2回11月9日、第3回11月16日)で開催されました(主催:奥日光清流清湖保全協議会)。私はそのうちの第1回と2回に参加しました。

第1回は中宮祠出張所で午後に行われました。しかし、10月26日といえば紅葉シーズンの真っ盛り。多くが途中からの参加という状態でした。内容は、県保健環境センター職員による、湖の基本的な事から奥日光の湖の現状等についての講座でした。奥日光の湖(湯ノ湖、中禅寺湖)のように上流にある湖は自然由来の汚濁負荷割合が大きいため、これを減らすのは難しいため、割合の少ない生活系由来の汚濁負荷をさらに削減する必要があることが強調されていました。気になる水質(COD値)では、全国184湖沼中、中禅寺湖は13位、湯ノ湖は69位で比較的良好な水質(H21年度結果)であり、特に中禅寺湖のここ10年間での改善率は全国2位となっていました。

また、湯ノ湖の透明度の経年変化ではH21年度は観測史上(S52～)最高の透明度を記録していたのは驚きと共に意外に感じました。コカナダモの生息域も、毎年の除去作業により縮小しています。

第2回は湯ノ湖での現地研修でした。まず湯ノ湖をぐるりと一周して日光自然博物館職員の案内で自然観察です。私は日光パークボランティア活動をしているのでだいたい分かっているつもりでしたが、違う視点で見ると意外な発見もありました。まだこの時期でもヒカリコケを見る事ができました。その後はボートに3名ずつ分乗して「透明度の測定」と「湖水の採水」です。実際このような調査をしていることが分かり良かったです。湖水はCODの測定とプランクトンの観察をしました。今回の結果は、透明度2.3m、CODは2mg/lでした。普段の透明度はもっと良好(8~10m)ですが今回低かったのは、コカナダモの刈り取り船が作業中だったのでにごりがあったのではないかとということでした。奥日光の湖では、このような県のモニタリングや対策により水質が保全されている事が分かりました。しかし、全体としては湯ノ湖流入の「大どぶ」や湯川の見た目の汚れがどうなっているのか気になります。「大どぶ」に対しての質問に対する県の回答は、汚染物質が混入していることは分かっているが、どこが原因なのかはまだ分からず調査中であり、その対策もまだという状況だということでした。(毛塚博子)

## お知らせ

次回の定例会

2012年1月25日(水)

日光市民活動支援センター

午後1時~2時



## 西大芦漁協

### 石原組合長を偲んで

思川開発事業計画(南摩ダム)に伴い、県営東大芦川ダムが計画されたのは昭和48年でした。西大芦漁業協同組合として平成7年より一貫して建設中止を訴えてこられた石原政男組合長が去る11月5日、病気のため逝去されました。80歳でした。

石原組合長は、ダムによって人々の暮らしや自然環境が大きく変えられてしまうことを深く憂慮し、7回にわたる栃木県当局との検討協議会には委員として出席され、文字通り体を張って、東大芦川ダム建設中止を強く訴えてこられました。明治期の殖産事業としての足尾銅山開発が大芦川源流の樹木伐採を招き、明治35年の大水害によって流域に多くの犠牲者を出したこと、水が余っている時代に利権がらみのダムをつくるのが如何に愚であるかを広く訴えた姿には、多くの人が心ゆさぶられました。山を守ることは川を守ることと自ら小さな支流に分け入り、自然産卵をする大芦川の固有種であるニッコウイワナのために、産卵床作りを永年実践してこられました。私達「今市の水を守る市民の会」も仲間が「大芦川」「白井平」を作詞作曲して建設中止を応援。現地でそれを演奏する時は暖かく包み込んでくれるあの笑顔で、いつも応えてくださいました。

平成15年7月、県営東大芦川ダム建設計画は中止が決定されました。石原組合長の大きな決断によって大芦川は守られたのです。中止を勝ち取るまでの石原組合長の深い思いを刻んだ石碑が、鹿沼市草久白井平にあります。広葉樹に守られた清流のささやきの中に静かに建つ碑の元に来ると、組合長のにこやかな笑顔と懐かしい石原節が蘇ってきます。石原さん、大芦川が守られて本当に良かったですね。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(塚崎庸子)



## 活動報告

- 7月27日 (水) 定例会
- 7月30日 (土) 川むしたんけん隊 (NPO和音)
- 8月24日 (水) 定例会
- 9月24日 (土) ボランティアフェスタに参加  
水生生物展示
- 10月9日 (土) 川むしたんけん隊 (NPOなんとなくのになわ)
- 10月26日 (水) 定例会
- 11月30日 (水) 定例会

### 郵便振替口座

00140-4-535550

### 連絡先

〒321-1102 日光市板橋1732-1 森方

### 今市の水を守る市民の会

0288-27-2183 (8時~17時:森)

0288-26-3324 (17時~21時:塚崎)

<http://somesing.net/daiyagawa/>

## 熊鈴

この間ス々に土呂部の沢を歩いてきた。マダギナイフにぶら下げた熊鈴が、カラン・カランと気持ちのいい音をひびかせていた。ほんの数ヶ月前、この熊鈴は頭上につまこれた細ヒモで結ばれ、ほぼ寝たきりの俺の介助の合づ用だった。幸いエナイフと言いつ放射線治療のおかげで、自分の事は何とか出来るようになったのは、昔夢のようです。さて、沢はもうすっかり冬仕度で、木々は昔末を落し、昨年は沢山目にした山石魚たちも大水で流されてしまったのか？木の昔末の積った山石の下にもぐってしまっただのか？その次女は見られなかったけれど、山沢歩きは楽しかった。車に戻り息子と愛犬？とあっあっのカップラーメン・おにぎりを食べた。久しぶりに山で食べた昼飯はうまかった。又、新緑の頃こられたらと思いがながら山を後にした。今年には東日本大震災が、あり大変な年でしたが、来年は皆様にしても良い年でありますように……

隅



## 編集後記

かみさんが家の近くで捨て猫を見つけた。生まれて1ヶ月も経たないらしく、小さな弱々しい猫で、かみさんの足に必死でしがみついていたという。出先でそんな知らせを受けたので「川へ捨てなさい」と言って電話を切った。ところが、家へ戻ってみるとその猫が座布団の上に寝ている。目を痛めているようなので動物病院に連れて行ったらしく、猫の目薬や腹薬まである●それから3ヶ月、川にも流されず、伝染病の予防注射まで受け、300gの体重が5倍にも増え、ついに我が家の一員になってしまった。子どもの頃、実家には飼った猫がいた。ネズミを捕るので、どこの家でも猫を飼っていた頃だ。猫を抱いた私の古い写真もあるけれど、自分がその猫にどんな気持ちで接していたのか、ほとんど覚えていない。いま、この年になって子猫と付き合うと、生き物には人間と同じ安らぎや不安や怒りなどの感情が確かにあるのではないかと思う●そう思うにつけ、自分の身にはあまり気にならなかった放射能が気になりだした。この子猫は、急激な成長期に原発事故で降った死の灰からの放射線をあびている。大丈夫なのだろうか。地面に近いところで生活する動物や昆虫は人間よりもはるかに放射能の影響を受けやすいに違いない●人間の子どもの過す環境の放射線の管理、飲み水や食事に含まれる放射能の監視を徹底することは言うまでもない。いっぽうで、森林や里山や川に住む生き物も、人間以上に死の灰の影響を受け、被ばくし、おまけに「除染」と称する人間の行いで被害を受けることを忘れてはならないだろう。12月になり、そんなとりとめのないことを考えている。来る年は、大地や水がこれ以上汚されることのない社会をめざす年にしたいものです。良いお年をお迎え下さい。(T)